

東京家政大学人間文化研究所紀要の創刊にあたって

人間文化研究所所長 関根 靖光

本学の学問的バック・グラウンドである家政学の嚆矢は、古代ギリシャのクセノポーンの著書「オイコノミコス」である。戦前の和訳では「家政論」となっているが、原典を読むと、テーマになっているオイコノミア術は家政術と訳すよりも、「所有物活用術」とでも訳すべき内容をもっていることが分かる。所有物が馬の場合、そのオイコノミア術は馬術であり、土地である場合は農耕術となる。オイコノミアを常に家政術と訳すと、馬のオイコノミア術は「馬の家政術」となり理解しがたいものになる。家は所有物のなかで生活上最も大切なものの一つであるが、この家のオイコノミア術こそ「家政術」と訳すべきものであろう。さまざまな所有物についてそれぞれのオイコノミア術がある。笛のオイコノミア術、羊のオイコノミア術、身体のオイコノミア術、時間のオイコノミア術、収納空間のオイコノミア術。笛も羊も身体も時間も空間も、その人の所有物である限り、その能力・機能を可能性のままにとどめず、活用して現実化すべき、というギリシャ特有の存在論がオイコノミア術推奨の背後に潜んでいる。

クセノポーンはその著書で、「秩序化」をオイコノミア術の秘訣として挙げているが、これは、2つ以上の所有物を活用するとき、それらの間に適切な秩序化をほどこす方が、個々のオイコノミア術だけによる効果よりも数倍も効果があがる、という経験から発想されたものであろう。秩序化によって、1+1は2以上の価値が生じるのである。秩序化は高度なオイコノミア術である。

秩序化のオイコノミア術の一例が、著書で紹介されている、オイコノミア術の達人夫妻が行う収納空間の秩序化である。夫妻は協力して、家の各部屋の機能を調べ直し、所有するすべての用具類を用途別に分類し、しかる後に各部屋に最適の用具類を収納する、というやり方で、家の収納空間にひとつの秩序を与えている。空間にうまく秩序をつくってそれがもつ隠れた機能を現実化する、という意味で、一種のオイコノミア術、すなわち所有物活用術なのである。

この収納空間のオイコノミア術の考えは、旧約の創世記に見られる創造主による宇宙空間の秩序化に酷似するものである。創世記の宇宙観は、いわば天、空、海、地という部屋それぞれに、最も適した生体が配置されてこの宇宙の秩序が創られている、と主張していると解せられる。天に天体、空に鳥、海に魚、地に獣と人間、といった具合に、である。近世イギリスのディグビー卿が自然界の秩序を指して「自然のオイコノミア」と造語した理由も上記のアナロジーから十分理解できる。

しかしこの「自然のオイコノミア」観は、ダーウィンが主張する、生存競争の結果としての自然の秩序、という進化論的自然観によって置き換えられていった。19世紀後半のドイツのヘッケルは、生存競争の進化論的メカニズムによって自然界の秩序を研究する

新学問を構想し、それに相応しい学問名を、オイコノミアから取ってエコロジーとした。

このように概念史を辿っていくと、エコロジーが、語源的にオイコノミアから派生しただけでなく、秩序化というキーワードを介して、概念的にもオイコノミアから派生したことが理解できる。

20世紀の家政学の創始者であるエレン・リチャーズは、当時最新の学問であったこのエコロジーに着目した。ヘッケルの生物学的エコロジーの定義は「生体と環境との相互作用」を研究する学というものであったが、リチャーズはそれを家政学に適用して、「人間の家庭生活を中心にして、それと環境との相互作用」を研究する学として、衣食住を中心とする従来のタイプの家政学を捉え直そうとし、新家政学を「ホーム・エコロジー」と名づけた。そしてホーム・エコロジーの目的を、健康・健全なホームの実現すること、と定め、環境科学の草分け的な仕事である科学的な水質検査などを積極的に行った。

他方、家政学とは別個に、人文・社会科学の分野もエコロジー概念に関心を抱き、そこから「人間を中心として、それと環境との相互作用」を研究する「ヒューマン・エコロジー」学が誕生し、20世紀後半、発展していった。そこで言われる環境とは、自然、文化、社会の3環境である。

以上の考察から、本学のように家政学部と文学部をもつ大学が、健康・健全な家庭生活実現のために生活と環境との相互作用を研究する「ホーム・エコロジー」と、人間を中心としてそれと3環境との相互作用を研究する「ヒューマン・エコロジー」の両視点を統合した学問・研究を、他の大学に先んじてでも積極的に推進することは、オイコノミア概念史の発展の点からも実に理にかなったことであるし望ましいことでもあると思われる。

18年4月に人間文化研究所の所長に就任した際、私の脳裏に去来した考えは上記のようなものであった。そこで本研究所の研究目的を、「健康で健全な人間・生活の実現のために、人間・生活と社会・文化・自然環境との相互作用を、主に人文・社会科学的観点から研究すること」とあらためて定め直し、この1年弱、さまざまな企画を通じて目的実現に資するよう邁進してきた次第である。

この度、本研究所紀要の第1号が発行されることになったが、掲載された4論文ともなんらかの仕方でも本研究所の目的に深く関わっていると考えられる。この創刊号を出発的に、今後は更に多様で且つ体系的な研究を推進し、「ヒューマン・ホーム・エコロジー」とでも名づけられる新学問の発展に寄与しようと、改めて決意している次第である。

最後に、本研究所の趣旨に賛同される研究者の方々に、ぜひ本研究所紀要へのご協力を切にお願いしたい。